

山梨県敷島町

大塚古墳



1986

敷島町教育委員会

序

今日のような社会生活においては、町民一人ひとりが心にうるおいを持ち、精神的に豊かであることが必要であります。

このことから町民の間には、町内の文化に関心を持ち、そこからより深く郷土史を学ぼうと願う町民が毎年増えています。

合せて歴史ブーム、古代史ブームと呼ばれる風潮の中で文化財の意義および保護、保存の在り方を学ぶ上で、必要な知識や考え方を正しく伝えたいというのが教育行政をあざかる者の念願であります。

町教育委員会では、こうした観点に立ち古墳で特に著名な大塚古墳の調査をいたしました。

この古墳は、敷島北小学校の校庭南縁にあり、以前からこの道の権威者により、その存在的価値が高まっていたものであります。

そこで、昭和57年4月第1次調査として、墳丘盛土状況、石室前庭部状況について調査を行い、これをふまえ昭和59年3月墳丘測量および石室内一部発掘の第2次調査を実施いたしました。

調査結果については、後記のとおりでありますが、本書が多くの方に利用され郷土の歴史や文化の研究および文化財の保護思想普及の一助になればと考えます。

おわりに、大塚古墳調査報告書を発刊するにあたり、快く調査にご協力いただいた地元関係者、町文化協会郷土研究部、また直接ご指導いただいた県教育委員会文化課および町文化財審議会委員の諸先生方に対し心から感謝申し上げます。

昭和61年3月

敷島町教育委員会

教育長 小宮山 清

目 次

I はじめ	1
1. 立地と環境	1
2. 大塚山信仰と古墳周辺の様相	2
II 調査経過	4
1. 調査概要	4
(1) 第1次調査	4
(2) 第2次調査	4
2. 墳丘	5
(1) 測量成果	5
(2) 墳丘裾部調査	5
3. 石室構造	7
4. 出土遺物	9
IIIまとめ	9

例 言

1. 本書は山梨県小巨摩郡敷島町境所在の町指定史跡大塚古墳の測量・発掘調査報告書である。
2. 本書の編集は末木健が行い、執筆分担はそれぞれ文末に記した。
3. 本書に使用した尖端図及び写真は町教育委員会に保管してある。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 敷島町教育委員会

事務局 教育長 小宮山 清 社会教育係長 山口正智

調査指導 敷島町文化財審議会会長 羽中田壯雄 同委員 末木 健

◆第1次調査 昭和57年4月17日～4月18日

調査担当者 佐野勝広（国士館大学史学科卒） 渡辺儀訓（明治大学史学科卒）

調査参加者 米田明訓、若尾澄子、小林ちえ子、強矢明子、岡田牧子、千野千鶴

協力者 境区長 田中正美、長田徳芳

◆第2次調査 昭和59年3月17日～3月31日

調査担当者 日向千恵（立正大学史学科卒） 平野 修（日本大学史学科卒）

調査参加者 佐野勝広、若尾澄子、小林ちえ子、中沢 修、古原千恵、大森範文、岡田牧子
強矢明子、小笠原睦子、広瀬勝子、玄間千鶴、石川浩久、小林弘司、熊谷徳藏

協力者 境区長 田中正美、長田徳芳 県立考古博物館 米田明訓、中山誠二

序

今日のような社会生活においては、町民一人ひとりが心にうるおいを持ち、精神的に豊かであることが必要であります。

このことから町民の間には、町内の文化に関心を持ち、そこからより深く郷土史を学ぼうと願う町民が日毎に増えています。

合せて歴史ブーム、古代史ブームと呼ばれる風潮の中で文化財の意義および保護、保存の在り方を学ぶ上で、必要な知識や考え方を正しく伝えたいというのが教育行政をあずかる者の念願であります。

町教育委員会では、こうした観点に立ち古墳で特に著名な大塚古墳の調査をいたしました。

この古墳は、敷島北小学校の校庭南縁にあり、以前からこの道の権威者により、その存在的価値が高まっていたものであります。

そこで、昭和57年4月第1次調査として、埴丘盛土状況、石室前庭部状況について調査を行い、これをふまえ昭和59年3月墳丘測量および石室内一部発掘の第2次調査を実施いたしました。

調査結果については、後記のとおりであります。本書が多くの方に利用され郷土の歴史や文化の研究および文化財の保護思想普及の一助になればと考えます。

おわりに、大塚古墳調査報告書を発刊するにあたり、快く調査にご協力いただいた地元関係者、町文化協会郷土研究部、また直接ご指導いただいた県教育委員会文化課および町文化財審議会委員の諸先生方に対し心から感謝申し上げます。

昭和61年3月

敷島町教育委員会

教育長 小宮山 清

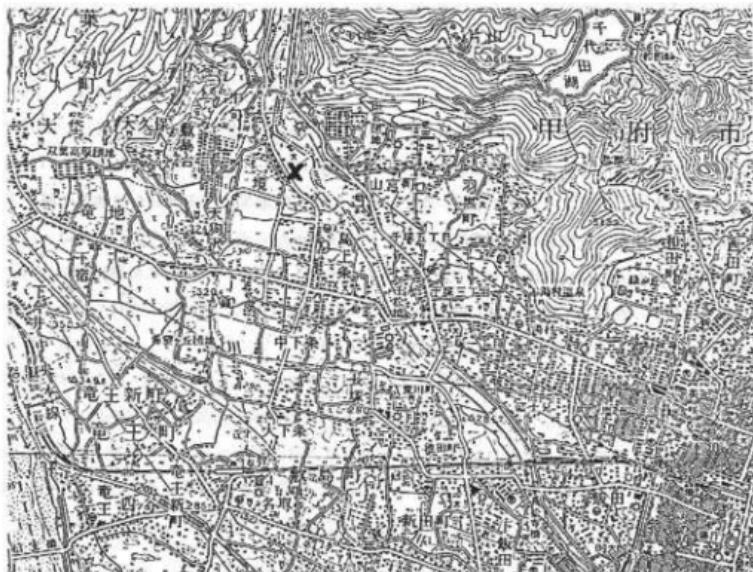
I はじめに

1. 立地と環境

本墳は甲府盆地北西縁の、荒川が形成した扇状地の扇頂近く、標高333mに位置し、川の右岸より約100m西にあり、町立敷島北小学校の校庭南縁に接して現在する。敷島町はこの荒川の流域及び支流に位置する南北に細長い町で、北半分が山岳地帯に、南半分が盆地内に属している。奥秩父山地の主峰金峰山（標高2595m）の南斜面から流れ出した荒川の源流は、深い峡谷を刻みながら、ほぼ真南に向って流下し甲府盆地へと注いでいる。有名な御岳昇仙峡は、この荒川がノミを振って彫り上げた峡谷の芸術作品で、国の特別名勝に指定されている。源から甲府盆地に達するまでの約20kmの間に、標高差1.7kmを一気に駆け下りること流れの荒々しさは、人々によってその姿のままの名称が与えられたものであろう。甲府盆地へ躍り出す手前で、茅ヶ岳（1704m）や曲岳（1642m）から雨水を集めた亀沢川と合流して水量を増すが、ここで流れは大きく直角に曲らなければならない。それは、第三紀水ヶ森溶岩で形成された片山が西へ突き出し、登美の坂を形成している黒富上火砕流と荒川をサンドイッチするからで、川はせばめられて盛り上ったエネルギーを噴出するように盆地へと押し出して広大な扇状地を作っている。

荒川の形成した扇状地は甲府盆地北部では最も大きなものと言われる。この扇状地上に人類が生活始めたのは、いつのことか明確ではないが、手許にある資料から言えば、敷島町大ド条の金の尾遺跡から縄文時代早期の押型文土器が出土していることから、今からおよそ6000年以上前になる。金の尾遺跡では昭和53年度に県教育委員会が中央道建設用地内を発掘調査し、縄文時代中期中葉の集落、中期終末の集落、弥生時代後期の集落及び周溝墓群が発見され、同町島上条金の宮遺跡、牛句宮の前遺跡、境西川遺跡、島上条大庭遺跡などから、縄文時代、弥生時代、古墳時代～平安時代の遺物が発見されており、縄文時代早期以降連続として生活の場であった証拠が残されている。又、古墳そのものは、大塚古墳周辺に数多く築造されていたと思われるが、現存するものは一基もなく、言い伝えもないようである。しかし、町内には島上条大庭のおさん塚、同金の宮の狐塚、無名塚が知られ、甲府市荒川二丁目穴塚古墳などが荒川右岸に、甲府市加牟那塚やその周辺にあったと伝えられる数多くの塚は荒川左岸に分布している。特に加牟那塚を含む一帯の町名は千塚であり、江戸時代に編纂された甲斐国志によれば、千塚村は古塚が多く残っていたことによって付けられた村名と伝えられている。

古墳時代の集落跡は古墳群の数の割には周知されている例が少なく、敷島町では金の尾遺跡だけであるが、甲府市では緑ヶ丘県営グランド遺跡、山交湯村営業所周辺遺跡、甲府工業遺跡（塩部遺跡）、飯田一丁目遺跡などが、盆地北西部で知られているだけである。甲府市も敷島町も分布調査が充分でないので、詳細調査を実施すれば更に数多くの遺跡が発見されると思われる。



第1図 位 置 図 ×：大塚古墳

2. 大嶽山信仰と古墳周辺の様相

大塚古墳は、頂部を露出した石室と、その上に建てられた大岳山供養塔、脇に枝をひろげたエノキの大樹がある、大岳山信仰の場であることが知られる。その地籍は敷島町境字横田258番地。

大塚の名称は、慶長6年（1601）10月6日の「北山筋坂井村御繩打水帳」（中巨摩郡志）に記されたなかに「大塚」の字名がある。のち境内から字名「大塚」は古墳が実在しながら失われるが、古墳は昔のまま「大塚」と呼ばれてきた。

「甲斐国志」古跡部の島上条村の古跡や古墳の項に「淳石（すべりいし）塚ハ周圍十六間上ニ石建 長サ九尺横五尺厚サ二尺ナリ 金石塚ハ周圍十八間建石ノ長サ一丈横七尺厚サ三尺敵之金声ノ余響アリ 二基トモニ石室ノ壙レタルト見ユ碑類ニハ非ラズ 御正作ト云フ処ニ石室ノ存シタルモノアリ 周回十七間許リ 石室一基境村……」とある。

境の「石室」とある大塚は保存されたことが



第2図 墓丘上の大岳山三社大権現

わかるが、周辺にあった他の塔は明治初年に消滅したといわれる。

大塚で境村講中の大岳山信仰がはじまった年代は明らかでないが、大岳講による大岳山供養塔の造立年時は文久2年（1862）である。石室上の台石に建つ供養塔は、高さ1.15m、幅約0.45mの自然石で、その表面に「大岳山三社大権現」と神号を刻み、右側面に「文久戊午年壬八月十七日 境村講中」と刻まれる。この塔は境村のある方向に西面して建てたものという。

大岳講は、東山梨郡三富村上釜口領座の大岳山那賀都神社を崇敬する信仰集団で、各地に多くの講社があり、広範な信仰をあつめている。祭神は大雷神（おおいからづらのかみ）、大山祇命（おおやまのみこと）、高靈神（たかおかみのかみ）の三神で、かつては大岳山三社大権現と尊称された。神社の創建については明確でないが、「甲斐国社記・寺記」の山緒によると「元正天皇養老元巳年三月十八日勅請鎮座……國師カ嶽奥宮へ七里余アリ 祭典は陰曆三月十八日……」と記される。現在の祭典は4月18日に行われ、大岳講團体や一般参詣者で賑わう。大塚の大岳山大祭は4月18日で、この日大岳講のなかで決められた4人の代参者が三富村本社での祭典に参詣をする。本社から御祈禱札を授与されると、轍を立て提灯を飾った大塚祭場に代参者はじめ講中全員が集まって祭儀が執行される。

また例祭は毎日17日である。なお例祭の神事は戦後になって行われなくなった。現在の大岳講は41人の講員がある。

大岳講が明治19年（1886）4月に講中の代参を記録した「大岳山代参講中山金帳」がある。そのなかに「記 一参詣代参之儀ハ年内一度 但し毎年舊三月十八日より相定メ……但し四人の事……」と規定があり、当時から伝わる古例の様子が知られる。

境は敷島町の大字の一つであるが、江戸時代は北山筋に属した境村であった。村名はさきに掲げた慶長水帳では「坂井村」と書かれる。地名の由来については「甲斐国志」村里部に次のような記載がある。

「境 村

一高三百九石四斗七升八合 戸三十六 口百二十一 男六十二 女五十九 馬六

島上条村ノ北八町西ハ天狗沢村五町許リニアリ 即チ志磨ノ荘、總坂郷ノ境ナリト云
ヒ伝フ」 これによって、文化年間（1804～17）の境村の概要がわかる。

境村は明治8年（1875）に福岡村の一部となり、さらに福岡村は昭和2年（1927）に敷島村、昭和21年（1946）敷島町という経過で現在に至っている。

境は荒川扇状地の扇頂部にあって、荒川右岸に位置する。県道敷島・竜王線が島上条から牛向へ南北に通じているが、古くから御岳金桜神社（甲府市御岳町）参詣の御岳道であり、旧道が残る。道沿いにある境集落の東部には「一の堰」の水利による水田がひろがり、その一郭に大塚がある。昭和45年（1970）10月1日、町指定史跡。最近はこの地域の開発と住宅化が進んできた。昭和53年（1978）開校の敷島北小学校グランドが古墳に接している現況である。

（羽中田）

II 調査概要

1. 調査経過

(1) 第1次調査

昭和57年3月に、地元の境ぎにあって、大塚古墳東～南にかけての埴丘裾部の石積工事が計画された。これは、古墳東南側が水田の為、永年の耕作によって埴丘が崩壊していくのを防止する為の工事であった。そこで町教育委員会は埴丘盛土状況、石室前庭部状況について調査するため、同年4月17日から2日間発掘調査を実施した。

(2) 第2次調査

昭和59年3月17日～31日にかけて、町史跡である本墳の基礎資料を作成する為、埴丘測量及び石室内の一部発掘調査を実施した。調査体制は例言のとおりで、特に町文化協会郷土研究部の方々には不なれな測量や発掘の手伝で大変な苦労をおかけした。

埴丘測量は3月17日、18日、23日、石室実測は3月17日、18日、23日、29日に行い、石室内の埋戻しは3月31日の町長及び町議会議員の視察後教育委員会で行った。この期間は春とはいえ、寒風が吹き荒れて測量の巻尺が大きく波うち、作業がしばしば中断されたり、石室内に砂塵が巻き込み目が開けられない状態であった。石室奥壁部の掘り下げは幅が狭く、床面まで80cmもあった為、作業が難行した。

(末木、佐野、日向、平野)



第3回 第1次調査風景



第4回 第2次調査風景



第5回 第2次調査石室内発掘風景

2. 墳丘

(1) 測量成果

大塚古墳の墳丘は周囲を大きく削り取られており、当初の規模を推測することは現況からは困難である。北側は町立北小学校のグラウンドによって削除され、東から南は水田によって自然とその規模を減じて来た。したがって築造時の墳丘規模や周溝の有無について確認調査が可能とすれば、南西側しか残されていない。しかし、この地も校庭造成時やその他の機会にゴミや礫を埋め込まれた事があると伝えられるので、期待はできないかもしれない。

現存する墳丘の径は南北16m、東西15mである。西側がやや張り出しているのは、墳丘の減少を防ぐ目的で、地元の区が土砂を押し付けたものである。石室は露出しており、天井石が現況では4枚架けられているが、奥壁に最も近い石は近年の補修によるものであるから、その他3枚が旧態をとどめる。羨門及び側壁、奥壁もほぼ残っているが、天井石の欠損している部分では側壁、奥壁とも1~2段壁石が無い。裏込石は側壁より1.5~2mの幅で観察できる。墳丘高は西側からは2.0m、東側水田面からでは4.37mであるが、天井石を覆う盛土があつたら、現状より1m以上は高く墳丘が存在したであろう。

墳丘規模は推定20m位で、赤坂台古墳群の調査例からすれば、周溝存在の可能性は低いと思われる。又、墳丘上にそびえる根の巨木は樹高15m程もあり、この古墳の偉容を一層高めている。

(末木、日向、平野)

(2) 墳丘裾部調査

昭和57年に行なわれた第1次調査は墳丘東部から石室正面前部までの裾部石積に伴う土層観察調査である。東裾部の最下層は黄色砂質土で、第V層は粘性はややあるがしまりの弱い暗褐色土で、IV層は黒色腐蝕土である。この層は、墳丘裾に全体的に見られることから、旧地表土と考えられる。II、III、VI~VII層は墳丘盛土の版築状況を示す層であり、暗褐色土又は茶褐色土と黒色土を交互に盛って墳丘を築いていることがうか

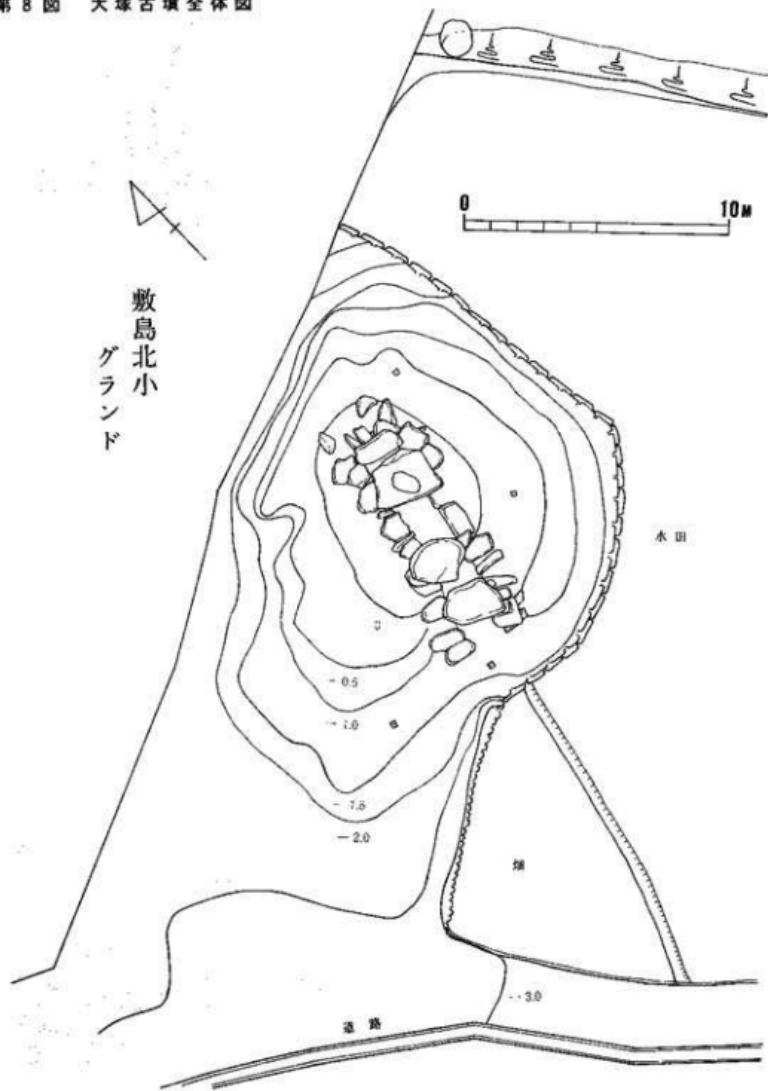


第6図 墳丘測量風景



第7図 墳丘裾部調査風景

第8図 大塚古墳全体図



がえる。

石室正面では重要な遺構が検出された。それは前庭部敷石と埴丘とを区画する石積であり、石室幅とほぼ同じ幅での前庭部（あるいは墓道と呼ぶべきかもしれないが）を持っていることを明らかにした。又この部分からは多量の礫とともに須恵器大甕の破片等も出土している。前庭部石積や右敷断面は第9図に示したとおりであるが、正面図上での正確な位置は、第2次調査まで1年ほどの期間があった為、仮杭等が移動してしまい図示することができない。

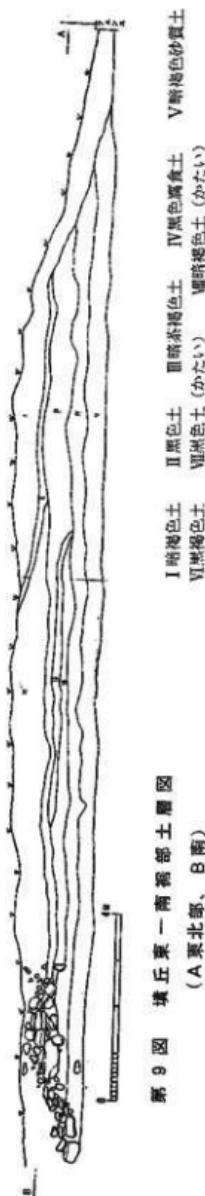
前庭部にある板状平石が前庭床だとすれば、南側天井石下面より約2m下に位置することになる。石室の調査の項でも述べるが、奥壁下で発見された敷石とほぼ同レベルとなり、この板状石の上面が古墳築造時の前庭部面と捉えて良い。しかし、縁石状に板状石を3枚重ねた石積が、前庭部の区画として理解して良いのかは、平面調査をまって結論を出すべきであろう。

（末木、佐野）

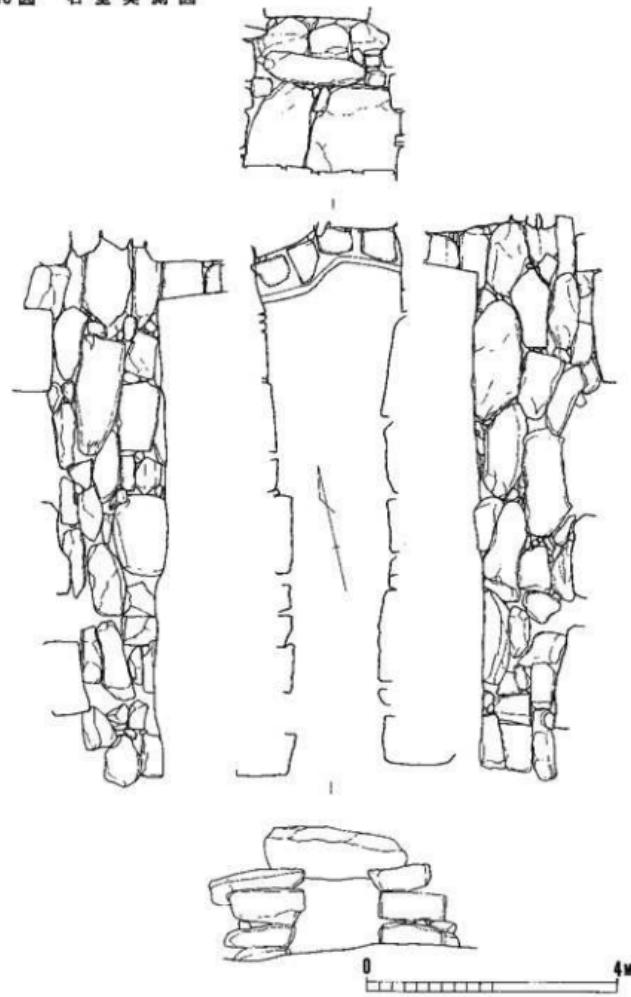
3. 石室構造

石室はN-14°-Eの主軸をもつ左片袖型横穴式石室である。玄室長4.4m、羨道長4.4m、東壁全長は現況基底部で8.70m、西壁全長8.40m、西歌謡門より袖まで4.50mを測り、主軸上の石室長は8.80mである。奥壁幅2.20m、袖部玄室側で1.82m、袖部羨道側で1.52m、羨門1.50mの幅がある。奥壁下を掘り下げたところ、現状地盤より約80cm下で敷石が検出された。50cm～60cmの方形板状石を敷いたもので、奥壁下では4枚が敷き並べてあった。この敷石は前述したように前庭部敷石とほぼ同レベルであることから、築造時の床面と考えられる。このことから、現存する天井石との高さを奥壁側から順に推定すると、最奥では2.7m、中央では2.5m、最前では2.1m位になり、石室内の土を完全に排出すると大人が自由に動き回ることができる空間ができるであろう。

側壁はおよそ幅1～2m、厚さ50～80cm、奥行1～1.5mの安山岩の自然石を多く利用して、横口乱石積にしており、玄室側が巨石を充分に安定させて積み上げているのに比べ、羨道部



第10図 石室実測図



は比較的小さな石を乱雑に積み上げてある為、ズレや歪が見られる。奥壁は板状の石を2枚並べて立っているが西側の石の西端が前にせり出していることから、奥壁面は「くの字」に屈曲している。この上の横口積の石より上は、近年の地元の人々の修復によるものである。天井石で奥壁上にかかるものもこの修理時に架けられた。

石室の裏込石は幅広く施されている様子で、側壁石外側へ50~70cmの範囲に人頭大の礫が見られる。羨門部両側では少なくなるので、玄室側壁部に多く施設されたものであろう。

(末木、日向、平野、佐野)



第11図 石室内調査風景

4. 出土遺物

第1次調査において石室南側部分より須恵器類破片が12点出土している。口縁部1点、頸部2点、胸部破片9点である。これらは羨中より雑然と出土したものであった。年代を確定できるような資料は乏しく、2次調査に期待をしたところである。第2次調査で奥壁部を掘ったが、陶器やゴミが土・礫に混って発見されるだけで、古墳時代の土器類は出土していない。しかし、骨片等が若干出土している。

(末木)

IIIまとめ

甲斐国の古墳築造の変遷については、ここ10年間位に飛躍的な研究の進展が見られ、その編年案も幾つか提示されている。その一つは坂本美夫氏による編年⁽¹⁾（1982 坂本）であり、最近では橋本博文氏の編年⁽²⁾（1984 橋本）がある。両者の編年では大きく年代観が異なるところは無いが、後期古墳の大型横穴式石室をもつ古墳の築造順序に若干の差が見られる。しかし、その差は発掘調査によって得られた資料の年代差ではないだけに、今後の課題ともなっている部分である。したがって、ここでは橋本氏の「甲府盆地内首長墓変遷図」を参考に、甲斐の古墳文化の概要を簡単に述べ、次に大塚古墳の位置付けについてふれてみたい。

甲府盆地に古墳文化が定着し、その中で中道町を中心に有力豪族が出現して、まず甲斐国の首長権を握ったと考えられている。東山上より昭和54年に発見された上の平遺跡は、100基以上の方形周溝墓群を形成しているが、この周溝墓群は米倉山に在る前方後方墳の小平沢古墳以前の年代、即ち弥生時代末～古墳時代初頭の形成と考えられることから、古墳時代の首長権がこの地で最初に確立される基盤が当然存在した訳である。小平沢古墳は紀元後350年よりやや新しい年代に造られたと推定されており、次に東山上の前方後円墳である大丸山古墳、そ

して東山北側の裾にある銚子塚古墳、丸山塚古墳、又、下向山の天神山古墳へと巨大古墳が連続的に造られていく。一方、八代町には岡銚子塚が、中道の銚子塚と同時期頃造られており、それ以前に造られたと推察されている方墳の竜塚もある。この勢力はあまり長期間継続せず、5世紀後半代には規模も小型化してしまう。一方、甲府盆地を挟んで西側の櫛形町上野には物見塚があり、5世紀初頭にはこの地でも有力者が存在していた。甲府盆地北縁部では今日のところ⁽³⁾4世紀～5世紀に含まれる古墳の発掘調査例は皆無であるが、甲府市和戸地内にはかって前方後円墳と推測されるような鍾乳塚、大神さん塚、古府中町のうなり塚があったと伝えられるが、これがが事実だとすれば、櫛形町に物見塚が築かれた5世紀初頭と同じ頃に中道町を中心とした地域から首長権が分散して、甲府盆地北部にも有力豪族層が定着したと推定されよう。

5世紀後半から6世紀前半には前方後円墳がほとんどなくなり、帆立貝式古墳と呼ばれる、円墳に短い方台部が付く古墳が各地に出現する。中道では天神山古墳を最後に際立った古墳は見られなくなり、かんかん塚（茶塚）などに当有力者勢力の余韻を見ることができる。⁽⁴⁾

6世紀中頃になると八代町莊塚、御坂町蝙蝠塚、甲府市万寿森古墳などに初期横穴式石室が用いられ、この3地域が新興勢力として出現して来たことを裏付けている。橋本博文氏は、各地域の横穴式石室を有する円墳の築造順序と各地域との交流の観点から、「万寿森古墳（甲府）→彈誓窟古墳（御坂）→加牟那塚古墳（甲府）→始塚古墳（御坂）」の築造順を考えており、最高首長権が甲府北部と御坂の間を往来したと推定している。こうした首長権の往来が存在したかどうかは別として、この地域を中心に群集墳が築造されるようになる。曾根丘陵上の後期古墳はあまり調査されていないので、どの程度の規模の古墳群が残るか不明である。一宮町と御坂町にまたがる金川古墳群をはじめ、錦生古墳群、一宮町千米寺古墳群、春日居古墳群、石和大蔵經寺山古墳群、甲府横根桜井古墳群、北原古墳群、愛宕山・夢見山古墳群、湯村山周辺古墳群、赤坂台古墳群、甲西町塚原古墳群などが盆地内の主要な古墳群である。これらの古墳群はそれぞれ特徴をもち、春日居から甲府市北部の山中には積石塚古墳と呼ばれる石積の古墳が多く、横根、桜井古墳群内には100基を超える古墳が残っている。しかしこうした数ではなくても、5～10基の古墳がかって存在した地域は多く、古墳の築造が一部の有力者だけに限定されて行われたのではなく、家父長単位にまでおよんだと認められる。それは生産基盤の拡大、即ち水田の造成やかんがい施設の充実という土木工事によって、かつて祭祀を中心とした首長権が、分散化し、権力が多様化したために古墳建築も拡大したと考えられている。

こうした古墳文化の中にあって大塚古墳がどのような歴史的意義を持つモニュメントであるのかについて、前述の橋本氏の説を手懸りとするだけでなく、最近は坂本美夫氏によって評里⁽⁶⁾の成立と古墳群や大型石室を有する古墳の関係が取り上げられており、こうした視点からの地域の意義付けも行なわれ始めている。大塚古墳が所在する当地は古代の巨摩郡に属し、後に同郡青沼郷の郷域に含まれた地域に属するが、万寿森古墳→加牟那塚古墳へと移った当盆地西北部の首長権が、次には赤坂台古墳群の二つ塚や往生塚、境大塚、大平1号墳、穴塚古墳などに⁽⁷⁾

分散化していく様相がうかがえる。しかし、石室構造の差や墳丘立地、周溝、出土遺物等について各墳主墳やそれを取り巻く古墳の内容把握が不充分である現在、これら古墳群が加牟那塚古墳と並列的配置であるのか、並列的存在なのかも含め分析していかなければならない課題となっている。

本報告書を作成するにあたって地元及び関係者の方々に大変協力をいただいた。記して謝意を表します。

(末木)

参考文献

- 1) 1982 坂本美夫 「山梨県における古墳（首長塚）の展開」 シンポジウム『古代甲斐国を考える』資料
- 2) 1984 橋本博文 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地 その歴史と地域性』所収
- 3) 1983 松浦有一郎他 『物見塚』 犬形町教育委員会
- 4) 1984 田代孝・荻原三男 『甲府市域の古墳分布と二・三の課題』『甲府市史研究』創刊号 甲府市市史編さん委員会
- 5) 1979 小林広和他 『甲斐茶塚古墳』 山梨県教育委員会
- 6) 1984 坂本美夫 「甲斐の郡（評）郷制」「研究紀要」1 山梨県立考古博物館・埋蔵文化財センター
- 7) 1978 末木 健他 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一 双葉町地内1』 山梨県教育委員会
1979 末木 健他 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一 双葉町地内2 - 竜王町地内 -』 山梨県教育委員会



大塚古墳遠景

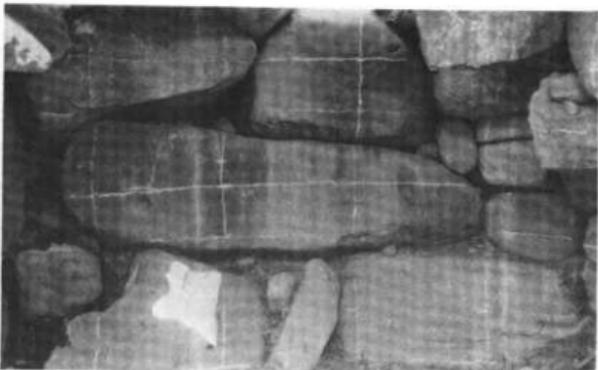


石室（奥壁）



石室（奥門）

奥壁



東側壁



床敷石



第1次調査前底部



第1次調査盛土土層



第2次調査參加者



昭和61年3月25日 印刷
昭和61年3月25日 発行

山梨県敷島町大塚古墳

発行所 敷島町教育委員会
山梨県中巨摩郡敷島町島上条1251
印刷所 青柳印刷

